

組曲「カレリア」Op. 11

J. シベリウス作曲

フィンランドの国民的作曲家ジャン・シベリウスが 1893 年に作曲した『組曲「カレリア」』作品 11 は、彼の初期を代表する傑作の一つであり、最も親しまれている作品の一つです。この組曲は、シベリウスがヴィープリ（現ロシア領ヴィボルグ）の学生組合の依頼で作曲した「カレリア」関連の音楽（劇音楽、行進曲、タブロー）から、人気の高い 3 曲を抜粋し、独立した管弦楽曲として編纂したものです。

カレリア地方は、フィンランドの民族叙事詩『カレワラ』の舞台であり、フィンランド人にとって精神的な故郷とも言える土地です。当時のロシア支配下で高まっていたフィンランドの民族意識と相まって、この作品は熱狂的に迎えられました。

組曲は以下の 3 曲で構成されます。

第 1 曲：間奏曲 (Intermezzo)

軍隊の行進を思わせる力強いリズムと、朗々とした金管楽器の響きが特徴。希望に満ちた力強さと、カレリア地方の素朴な叙情性を併せ持っています。

第 2 曲：バラード (Ballade)

第 1 曲とは対照的に、深い哀愁を帯びた旋律が歌われます。イングリッシュホルンが奏でる切ない主題は、カレリアの歴史の影や、消えゆく伝統への追憶を感じさせます。

第 3 曲：行進曲風に (Alla marcia)

活気に満ちた快活な行進曲。トリオ（中間部）では民謡風の旋律が現れ、親しみやすくも熱狂的な盛り上がりを見せ、堂々としたコーダで締めくくられます。

全体を通じて、シベリウス特有の色彩感あふれる管弦楽法と、民族的な旋律が巧みに融合しており、素朴な力強さと深い情緒が同居した魅力的な作品です。